

## 学習規律の指導と総合的学習

—鳥取県日光小学校 5・6 年総合「ゴッホのひまわり」を事例に—

栗原 昭徳

Teaching about Learning Rules and Integrated Learning  
—A Case Study of Integrated Learning “Gogh’s Sunflowers”  
in the Fifth and Sixth-grade Classes in Nikkou Elementary School, Tottori Pref.—

KUWAHARA Akinori  
(Received January 15, 2008)

キーワード：総合的学習、学習規律、図書館

### はじめに

本論で取り上げる日光小学校は、大山の南西山麓、海拔450mに位置する山あいの小さな学校である。この小学校で、筆者は、それまでの日光小学校における教師集団の研修の成果であり、子どもたち自身が体得してきた「学習規律」に依拠しながら、子どもたちにとっては初めて体験することになる内容の「総合的な学習」の授業を試みた。

この学校の子どもたちが身に付けてきている優れた「学習規律」は、授業での学習の際に生かされている事柄ばかりではない。日常の学校生活のあらゆる場面でも活かされている。たとえば、登校や下校のときの挨拶や言葉使いなどから始まって、朝読書・全校朝会、学級の朝の会・終わりの会の運営、業間での遊びや掃除や給食のときの態度の中にも発揮されていて、じつは、日光小の子どもたちの生活態度そのものが、私に言わせれば「美しさ」を持っていると表現してもよいほどである。もちろん、私の目から見る子どもたちのそれらの学習規律や生活態度等は、日光小学校の先生方が、営々として取り組んでこられた研修と教育実践の成果なのである。

その教育実践の全領域における成果のなかでも、他校の教師からみれば羨望の的でもある日光小学校の子どもたちの授業における「学習規律」に依拠しながら、私自身が総合的授業を試みたのである。授業の日時は、2007年2月20日（火曜）の1・2時限目、そして22日（木曜）の3時限目。中1日をおいた2日間で、計3時限の授業を実施したのである。子どもたちは日光小5・6年複式学級の児童であり、6年生が7名、5年生が2名、計9名であった。授業のテーマは、総合的学習の「ゴッホのひまわり」であった。この授業の様子は、日光小学校の先生方が参観されたばかりではなくて、同じ郡内の有志の先生方、そして近隣の小学校の保護者も参観された。（注1）

8人の子どもたちは、私の指導する総合的学習の授業に対する学習準備はもちろんのこ

と、授業始まりのあいさつ、さらに難しい課題に対しても気後れすることもなく、図書室での調査活動や発表、話し合い、ノート活動に積極的に取り組んだ。また、各児童に新しいノートを配布して、ノート中心の総合的学習の経営をねらうとともに、「家庭学習」への取り組みも授業指導の発展活動として組み込んでみた。

子どもたちの学習への取り組み方や発表の仕方や聞き方、学習活動の成果は、「見事」と表現してよいほどの出来であった。長年にわたる継続的で熱心な授業研究の成果である、子どもたちの「学習規律」の実力が、文字どおり「遺憾なく発揮された授業」となった。

本論では、その授業を実現するまでのきっかけや経過、指導案を作成するにあたっての留意事項や子どもたちの活発な学習活動を生み出す授業構想の仕方や指導のあり方を、できるかぎり授業の事実在即して述べてみたい。

この複式学級の5・6年生の子どもたちに対しては、私自身は特別に深い思い入れがある。というのは、この6年生たちが、まだ2年生であった年の秋に、この日光小学校での授業改善のための校内授業研究が実質的に始まり、それ以来、この日光小学校の子どもたちおよび先生方とは、授業研究を通じて親密に付き合うことになったのであった。それは、2003年の秋のことで、ちょうどクルミの実が熟して、大きな枯葉とともに落ちる季節のことであった。

当時、2年生であった二人の女兒が、給食のあとの休憩時間に、校長室にやってきて「クルミを取りにいきませんか」と、私に話しかけてくれた。クルミ拾いに誘ってくれたのであった。さっそく、二人の女兒といっしょに靴をはき、玄関を出て運動場のそばにあるクルミの木の下まで歩いていった。その途中でも、二人は、しきりに話しかけてきて、たくさんのお話をしてくれるのであった。クルミは、小粒ではあったが、何とビニール袋いっぱいも拾ったのであった。そのときの子どもたちの言葉が心に残っている。「栗原先生、クルミの食べ方を知っていますか」と質問してくれたのであった。もちろん、私は、本物のクルミの木の下で、本物のクルミを初めて拾ったくらいであるから、「知りませんよ」と答えざるをえない。すると、それはそれは丁寧に、一つ一つの段階を追って、クルミの洗い方から、フライパンでの焼き方、実の出し方、調味料にいたるまでの、詳しい食べ方を教えてくれたのであった。そのときの子どもたちの言葉は、きちんとした共通語であり、話し方も礼儀正しく、聞き取りやすい話し方であった。

その後、この学校の子どもたちの「授業の実力」は大いに高まって、何度も地域の先生方に対して公開授業をしたり、大学で私の指導する学生たちを連れて行って授業参観をしたりする機会も多くなった。この日光小学校の教育実践の一つの山は、文部科学省指定の道徳授業の公开发表会であった。当時の校長は佐々木芙美子先生で、わかる授業の実践を大切にされ、芸術教育にも造詣が深く、筆者が先に「生活態度そのものが『美しさ』を持っている」と書いた子どもたちの姿は、実質的にはそのころからの教育の成果である。佐々木校長のあとを受け継がれた中原由美子校長も、それまでの教育方針をいっそう生かされて、着実に日光小教育を深められた。

その子どもたちが、2007年3月には卒業をむかえて、中学校へ進学するという。それまでの研修の総まとめとも言うべき、特別の研修をしておかなくてはとの思いから、子どもたちの学習規律（子どもの側から見れば「授業の実力」）に支えられた授業実践を思い立った。それも、教科の授業ではなくて、子どもたちには初めてとなる内容であろうと予想

される総合的学習の授業を思い立ったのであった。

じつは、前述のクルミ拾いに誘ってくれたのが、このたびの私の授業でも活躍してくれた「ショウコさん」と「ナツキさん」であった。さっそく、この二人の6年生が、私の指導した「ゴッホのひまわり」の授業に参加して、どのような感想を持ったのか、二人のノートを覗くことにしたい。

## 1. 「ゴッホのひまわり」授業の感想（子どものノートから）

あとで示す指導案の中に、「3 ■ノートの配布と書き始めの指導」という形で示しているように、1時間目の授業の始めの段階で、子どもたち一人一人にノートを1冊ずつ配布した。ノートは、B5判、縦書き15行、30枚、全60ページの既製ノートである。

ノートの使い方や書き方も、ゆっくりと時間をとって具体的に指導をした結果、子どもたちのノートの最初のページには、つぎのように書かれている。

二〇〇七年二月二十日、火曜日、	桑原先生
「ゴッホのひまわり」	

2年生のときに筆者をクルミ拾いに連れて行ってくれたショウコのノートは、最初のページから24ページまでが使われている。そのうちの、14・15ページが、桑原授業についての「感想」である。以下に、そのまま引用する。

### ■ショウコのノート

(14ページ)

「私は桑原先生とゴッホの「ひまわり」について学習して、とても楽しかったです。今まで知らなかったことをたくさん知ることができました。調べ学習はしたことがあるけど、こんなにみんなが調べたことについて話し合ったことはありませんでした。①みんなが調べたことを聞いていると、私が全く知らなかったゴッホの人生や作品のことについて、たくさん知ることができました。一つ一つのことについて、じっくりとやっていくので、内容がすごくよくわかりました。みんなはパソコンで調べていたけど、桑原先生は専門家に聞いた話を話してくださいました。パソコンだと、なかなか見つからないような話でした。その時、「パソコンもいいけど、人に聞いたほうがよくわかる場合もあるんだな」と思いました。

私は、ゴッホについては、名前と「ひまわり」「肖像画」ぐらいしか知らなかったけど、今回の勉強でゴッホの人生や、（以下は、ノート15ページ）作品など、たくさんことがわかりました。

宿題で出た、ゴッホについて調べることは、新しいことを知るのが、とても楽しくて、時間を忘れてしまいそうでした。②今まで、こんな楽しい調べ学習することはなかったし、パソコンや本などの他に、人に聞いたり話し合ったりするのが、こんなに大事なことだったとは知りませんでした。今回の勉強を活かして、「知りたい」と思ったことは調べたり、いつもパソコンを使うのではなくて、人に聞いてみたりして調べようと思いました。この勉強で学んだことを、しっかりとこれからの生活に活かし

ていきたいです。③

ショウコの桑原授業に対する感想文は、ノートの2ページ、ほぼ800字にわたっている。アンダーラインと番号をつけたように、授業について論じる場合にも、示唆の多い本来的な意味でのノート（気付き、notice）であり、ノート（記録、note, document）となっている。

ショウコが、①で「みんなが調べたことについて話し合ったことはありませんでした」と書いてくれているように、総合学習における調査と言えば、「みんなちがって、みんないい」とばかりに、これまでは一人一人の子どものテーマがバラバラで、違っている方が良いとされてきたようだ。そのために、教師から子どもたちに対する調査活動の成果への期待が弱まり、達成されるべき成果や評価の基準があいまいとなり、「自分なりにしたこと、できたこと」が子どもの自己評価を通してそのまま容認されることが多かった。しかし、一つのテーマをめぐる、ほぼ同じ条件の中での調査活動を展開しながら、習得した情報を交換し合い、比べ合うことで学習活動が促進されることを教えてくれる。

ショウコが②で「宿題で出た、ゴッホについて調べることは、新しいことを知るのが、とても楽しくて、時間を忘れてしまいそうでした」と書いてくれているように、それを宿題と呼ぼうとも家庭学習と呼ぼうとも、教師の指導の仕方しだいで、「楽しくて、時間を忘れてしまいそう」になるほどに熱中できる対象となることを教えてくれる。

さらに、「この勉強で学んだことを、しっかりとこれからの生活に活かしていきたいです」と③で書いてくれているように、この総合的学習「ゴッホのひまわり」の時間にとどまらず、さらに授業時間だけににとどまらず、自分の「生活に活かしていきたい」というのであるから、もともと「総合的な学習の時間」として導入された時間の「ねらい」そのものも、達成できているのである。じつは、このような子どもたちの着実な学習活動を支えているのが、日光小の子どもたちの確かな「学習規律」なのである。

## ■ナツキのノート

ナツキのノートは、28ページが使われている。その中の9ページ目に、「感想」として、桑原授業のことが述べられている。その部分だけを、以下にあげる。

**〈感想〉** 1回目の授業では、その場でゴッホについて本で調べました。そこで困ったのは、ゴッホについて書いてある本がなかなか見つからなかったことです。1冊だけ、知っている本はあったけれど、他の人に見つけられてしまいました。でも、その本のとなりに、「ひらめき美術館」という本があったので、すぐに手に取り、調べ始めました。すると、いろんな画家の中にゴッホの名前がありました。そこからやっと、ゴッホについて調べ始められました。わたしはここで、「インターネットを使うのと、こ  
うやって本で見つけるところから始めて調べるのでは、力のつき方がだいぶちがう  
んだらうな」と思いました。①

2回目の授業では、みんなでそれぞれ調べて来て、調べたことを発表し合いました。その時に、「一人の力よりも、みんなの力はやっぱりすごいな」と思いました。②私は、「ゴッホの人生」についてではなく、他の事について調べていたので、発表が出来ませんでした。でも、自学でまとめることが出来ました。

桑原先生の授業で力がついたと思います。ありがとうございました。③

現在の教育現場での総合的学習の授業における「調査」といえば、ほぼインターネットを使うことを意味しているようだ。このことは、プレゼンテーション(presentation)といえ、パソコンを使った画面表示を用いての説明であるとする考え方が、大人の間でも流布していることと酷似している。もともと「presentation」というのは、「贈り物のように丁寧に届けること」であり、聞く人の目の前に「現在化・現前化すること」にはかならない。けっして画面で説明することに限定されてはならない。ここでナツキが言っているのは、パソコンの操作さえできれば簡単に誰もが情報を獲得できる「インターネットを使うのと」、このたびの総合的学習の授業で取り組んだように「こうやって本で見つければいいところから始めて調べるのでは」、調査の方法も、労力もちがってくる。その結果、「力のつき方がだいぶちがうんだろうな」と考えるにいたる。ナツキが、「インターネットと図書館の本」の違いを、どのように考えたかの結論自体については、筆者は、③に表現されていると受け取る。最後の行に「桑原先生の授業で力がついたと思います。ありがとうございました」とある。

また、この授業を通して、ナツキが「一人の力よりも、みんなの力はやっぱりすごいな」と思いました、と書いているように、図書館での調査学習のおもしろさ、楽しさばかりではなくて、「すごさ」をも感じとっていることに、筆者としては着目したい。

## 2. 指導案の作成

授業は2007年2月20日(火曜)の午後に2時間続きの授業を実施して、中1日を空けて、22日の午前中に3時限目の授業をすることになっていた。

前日19日(月曜)の午後には、鳥取市内の中学校の校内授業研究会、間の21日には地元の中学校の校内授業研究会などが組み込まれていた。文字通りの忙しい日程をぬっての「ゴッホのひまわり」授業となってしまった。

本論で扱う総合的学習「ゴッホのひまわり」の指導案は、次に示すとおりである。授業実施当日の朝の約2時間をかけて作成した。13時に日光小学校に到着してコピーをお願いしたので、参観者の手に届いたのは、授業開始の直前となった。

指導案の中には、「\*」印をつけて、本論執筆に際して若干の説明が加えてある。

2007. 2. 19. 月 . 8:00-  
指導案作成開始

### 図書室調査学習指導案

指導者 栗原昭徳  
(山口大学教育学部)

日 時	2007年2月20日(火曜)5時限・6時限 2月22日(木曜)2時限
子ども	鳥取県西伯郡伯耆町立日光小学校5・6年児童 (5年2名、6年7名、計9名)

- 場 所 鳥取県西伯郡伯耆町立日光小学校、図書室
- 主 題 図書室で調べてみよう——「ひまわり」を描いたのはだれか  
(国語科としても、総合的な学習の時間としても可)  
\*年度末なので、授業時数の扱いとしては、「教科」としても、  
あるいは「総合的な学習」としても良いことを記しておいた。

#### 栗原授業の目的

- \*栗原授業は、年度の当初から予定されていた訳ではない。2学期末になって構想しはじめた授業であり、研修に資することを最優先の目的とした。
- ほぼ5年間、一緒に授業研究を進めてきた日光小児童の学習規律をもとにしながら、子どもにとっては初めての教材をめぐって、図書室での調べ学習を試みる。
  - 小学校高学年児童による図書室での調査学習に必要な基本的な知識と技能の内実を明らかにする。
  - ノートを中心とした国語科(あるいは総合的な学習)の経営のあり方も考察したい。

#### 本時の目標

- 授業に参加するためのルールやマナーなどの学習規律(子どもから見たら「授業の実力」ないしは「学級の実力」)を発揮しながら、調査活動を進める。
- 自分で調べたゴッホについて分かったことを発表し合い、新しい知識を習得するとともに、調べ方についても発表し合う。
- ゴッホの絵(コピー)をノートに貼ったり、板書をノートに視写するなどの記録の仕方やノートの使い方も自分で工夫し、お互いに発表しあう。
- はさみや糊の使い方も学習活動として取り入れて、体験する。
- 授業から発展する家庭学習を提示して、自分で調べる楽しさを味わう。

- 準備物 ○ノート、チューブ糊。はさみは児童が準備する。
- (栗原) ○ゴッホ作品のカラーコピー。
- 第1日目、①ひまわり、②糸杉・アルルの跳ね橋
- 第2日目、③オーベールの教会(絵と写真)、ゴッホ自画像、ガシェ医師、ほか、④タンギーじいさん
- カラスのいる麦畑(1890、アムステルダム・ゴッホ博物館ポスター、パッケージ入り)

#### 指導過程(第1日目)

- 印以下は、教師の働きかけ  
C「・・・」は、予想される子どもの学習活動

#### 1 ■授業の始まり

定刻に始まるか(日直の活動)、学習準備、始めのあいさつなどについては、

子どもたちの「授業の実力」に任せ、その成果を教師から評価をする。

○本時の授業の目的の一つ「君たちの授業の実力を出してもらいたい」と付け加える。

2 ■ ゴッホの「ひまわり」の絵（コピー）を配布する

○絵を手にしたときの子どもたちの動きに着目して、知っていることを発表してもらおう

○ ひまわりの絵だ。どこかで見たことがある。

「ひまわり」という絵だ。ゴッホという人が描いた絵だ。

○教師は、子どもたちの発表を、単語を中心に板書する。

縦書き、右半分に、ゴッホについての知っていること。

左半分に、調べ方を板書する。

3 ■ ノートの配布と書き始めの指導

○ノートの配布

子どもたちに配ってもらう。T、配り方を評価する。

○ノートの使い始め。日付、授業者、桑原の名前も書く。

本日の授業の題名は、子どもたちの意見を入れて、「ゴッホのひまわり（を調べる）」に。

鉛筆の持ち方、次の大きさ、字の配置（バランス）、丁寧さ、濃さ、……などを評価する。

4 ■ 図書室で調べてみる

○まず10分間程度。

子どもたちと話し合って時間を決める。

5 ■ 調べたことを発表する

○板書（ゴッホについて調べてみて分かったこと、調べ方を中心に）

○「ゴッホの正式の名前、生年・没年、生まれた国、描いた作品（絵）第……」など

○子どもたちがゴッホの「糸杉」「アルルの跳ね橋」を話題にしたら、絵も配布する。

2枚の絵の印象を率直に発表してもらう。

印象派、跳ね橋など、難しい言葉については、教師が説明をする。

● 5時限、終了。休憩。

6 ■宿題（あるいは図書室での作業）を提示する

○ハサミ、チューブ糊も配布する

○家庭学習「ゴッホについて、さらに調べてみること。

分かったことは、ノートに書いてくる。

ノートの表紙に題名と自分の名前なども書く。

ひまわり、糸杉、アルルの跳ね橋の絵も、貼る。」

T 「つづきの授業は、22日（木曜）の3時限目にする予定です」

7 ■本日の授業の感想

T 「今日、栗原といっしょに勉強してみて、どんなことを感じましたか」

子どもたち全員に、率直に言ってもらおう。

○担任の先生、校長先生にも感想を述べていただく。

8 ■授業終わりのあいさつ

■板書計画

調 べ 方	ゴ ッ ホ	ひ ま わ り	ゴ ッ ホ の	○ 月 ○ 日
	桑 原			

\*板書は、年月日、授業の題名、授業者「桑原」の名前を書いたあと、大きく前半分に「ゴッホについて知った事柄」を、後ろ半分には「調べ方」を書くことを心がけた。

■家庭学習 帰宅後でなくても、図書室で調べてみるもよい。

\*今回の「ゴッホのひまわり」の授業の大きな目標の一つである家庭学習への取り組みの指導についても、この日光小の実態に合わせて、放課後の学校図書室を利用することも考慮した。

以上、1日目指導案、作成終了、2007/02/20.07:30、計2時間

\*1日目の指導を作成するのに要した時間は、およそ2時間であった。

3. 1時間目の授業の実際（授業記録）

以下、授業始まりの13時50分からの「授業記録」を、できるだけ詳細に示しながら、日光小学校5・6年生の授業における「学習規律」の実態と指導方法等について、分析を進める。



授業記録における記号は、以下のとおりである。

教師としての栗原の発問や指示、説明、指名などの指導活動については、「栗原」として明示したあとで、発言や支持等の言葉を書き出した。また、説明は（・・・）の中に書き加える形をとった。

子どもたちの発言内容や行動等については、「C」のあとに記述した。

また、以下の「1 ■授業の始まり」、「2 ■ゴッホの「ひまわり」の絵（コピー）を配布する」などの項目は、指導案の番号に対応させてある。

## 1 ■授業の始まり

### 日直の役割

13時50分前、授業者の栗原は、あらかじめ図書室で「ゴッホのひまわり」の授業の準備をすませ、授業の開始を待っている。5・6年生の子どもたちが、静かに図書室に入ってきて、自分たちで授業の準備をすませる。

参観者も、すでに入室されている方もある。

\*この5・6年生の子どもたちに対しては、この場面での学習の準備に関する教師側からの指示は、まったく必要がない。それほどに、学習規律の習得と習熟が十分にできているということであり、学習の内容と方法については本時で新しく出会うことになることがら多いが、学習参加のルールやマナーである「学習規律」は、それまでに習熟してきたことを適用することで十分に対応できるということでもある。これが、この日光小学校において着実な学習規律の指導がなされてきた証拠でもある。

13時50分、日直が「これから総合の勉強を始めます」と、他児に呼びかける。

\*日直の判断により、日光小側の教師の了解を得て、授業始まりを呼びかけたようである。ビデオ記録の中で、日直の子どもと教師の一人が互いに、目で合図している様子が、わずかに記録されている。授業者の栗原の方は、10分後の14時が授業始まりと思い込んでいて、少し意外に思っている。その後、これに対応することになる。

日直の声を聞いた他の子どもたち、即座に「はい」と返事をして、礼をする。

日直が「着席」という。子どもたち、静かに着席する。

\*授業の始まりは、いつもの先生とはちがう栗原がいても、そのうえ、自校および他校の先生方や保護者が参観されていても、子どもたちの声や態度は落ち着いている。静かで、落ち着いた授業始まりの活動である。授業始まり時の「遅刻・私語・忘れ物」は、新任教師の3つの悩みでもある。この日光小学校の子どもたちや先生方に、そのレベルの悩みは、すでに無くなって久しい。

栗原、時計を指さして、「だいたい（いつも、13時）50分始まり？ 授業（は？）」と、子どもたちにたずねる。子どもたち「はい」と返事をする。

栗原「あっ、そう。はい。あもう、先生は、2時からだと思っていたけど、君たちの方が正しいんだから。そしたら、やりましょう」

## 自己紹介

栗原「そうだな、せっかくだから。（座席を指さして）5年がここにいるんよなあ、6年がここ。（子どもたち「はい」と返事をする）せっかくだから、ひとりひとり簡単な自己紹介をしてくれるかな？ 知ってたはずなんだけど。ちょっと姿勢を良くして。（注意する）はい。それじゃあ、あなたから、いこうか」

最初の子どもが立って自己紹介をしようとする。

栗原「あっ、座ったままでいいよ」。

子どもたち、着席したままで、座席の順番に自己紹介をする。

C「わたしは、6年のN・ナツキです。よろしくお願いします」

栗原「はい、N・ナツキさんじゃなかったかな、2年生のときに、クルミを、ある場所に行って教えてくれたのはね、ショウコちゃんと二人でね。あの子たちが6年生になったんですね。（参観者から笑いがこぼれる）しっかりとした2年生でしたからね。（隣の席の子どもを指さして）はい、お願いします。」

C「6年のY・シュウジです。よろしくお願いします」

C「ええと、6年のK・ショウコです。よろしくお願いします」

栗原「お母さんも、よく知っているんですよ、中学校で」

C「6年のN・アミュウです」

栗原「N・アジアの亜、美に、優。これは、いい名前をつけてもらったなあ」

C「6年のI・ユイです。よろしくお願いします」

C「6年のK・ハヤトです。よろしくお願いします」

栗原「K・ハヤト君、なんか足が速そうですね」

C「6年のM・ナオユキです。よろしくお願いします」

栗原「Mくん、そして、5年の」

C「5年のH・ショウマです。よろしくお願いします」

C「5年のE・ノブキです。よろしくお願いします」

栗原「はい。あなた方の名前はねえ、ずうっと、私、覚えています。名前もですが、どんなことをしたかも、覚えているんですよ。佐々木先生が校長先生のときに、（私が）来はじめたんではないかね。だから、ちょうど5年の付き合いではないでしょうかね、君たちとは。」

## 1枚の絵（コピー）を配る

栗原「さあ、今日はね。「生活」（栗原、言いまちがえる）、じゃあない。「総合の授業」です。「国語の授業」といっても、いいかもわかりません。

いきなり、何かを見せますので」といって、栗原、緑色の封筒の中から、A5判大の白い紙を裏返すようにして、机の上に置く。

栗原「そうか、裏返しにして配って、同時に見るのがいいのだろうか。どっちにします？」と問いかける。

栗原「同じものを、一つずつ、上げます。裏返しでしょうか。じゃあ、ちょっと、こう。送ってあげてください」と言いながら、白い裏の方を表にして、机の上を滑らせるようにして、みんなに配る。ゴッホの「ひまわり」の絵のコピーを、裏にした常態で配布する。

栗原「はい。これ、みなさんに上げますからね。」

さあ、同時に見て。はい、どうぞ見てください」

これ、何かねえ。何だと思う？」

子どもたち、口々に「ひまわり」

栗原「うん、ひまわり。写真かねえ、これ」と問う。

子どもたち「絵」「絵です」などと、口々に言う。

栗原「絵じゃね」

### 最初の発問「絵を見て気づいたことは？」

栗原「これを見て、なにか考えついたことありますか、思うこと、なんでもいいですけど。気がついたことを言って。いちおう手を上げて言って。なんとも思わない？」

C、挙手する。栗原「はい、どうぞ。どんどん」と指名する。

C「明るいなと思います」

栗原「明るいですね、これ。パッと見て、あかるいですねえ。

なにしろ、黄色ですから」

C「この絵の中のひまわりが、全部枯れています」

栗原「おう、ぜんぶ枯れているねえ。生き生きとした感じではなさそうです」

C「全部が同じひまわりではなくて、それぞれちょっとずつ違っている」

栗原「なるほどね、花びらがついたものもあるし、ついていないものもあるね。同じひまわりでなく、少しずつ違っている。本当のひまわりって、こんななかあ。大丈夫かなあ、これは。5年生の二人」といって、5年生に指名する。

C「ぼくは、ショウコちゃんと似ていて、花、一つ一つの色がちがっていると思うう」

C「ええと、ぼくもショウコちゃんと同じで、花の一つ一つの色がちがうし、それに、この絵は油絵だと思います」

栗原「ほう、油絵というのがあるのか。ショウマ君、油絵というのは、どんな絵かねえ？」

C「油を使って描いている絵のことだと思います」

栗原「みなさんが使うような絵の具じゃなくて、これは、油絵。みなさんがやるのは、あれは何？」

子どもたち、「水彩」と口々に言う。

栗原「水彩よね。彩という字は書ける？」

栗原、漢字を書こうとするが、「彩」が思い出せない。

栗原「あぶないときには書かない方がいいですね。みなさんの使うのは、水彩ですね」

\* 深入りしない。

栗原「ほかに、なにか？ まだ発表していない人はいる？」

\* 子の言葉を言うと、すぐに挙手があり、まだ発表していない子どもが発言する。

C「一つ一つの花の方向が、ぜんぶバラバラです」

栗原「(バラバラというのは) うん、たとえば、これは？」

C「たとえば、斜め下を向いているのもあれば、ななめ上を向いているのもあるし、ええと。ななめ上を向いているのもあれば、横を向いているのもある」

栗原「正面向いているのもあるよね。見る人に向かうのもあるよね。なるほど」、\*一人の子どもの「斜め下、斜め上、横」という方向に付け加えて、子どもが気付くことがないと予想される「真正面、つまり見る人に向かってくる方向」を教師側から示したつもりである。このように、授業では、教師ならではの意見も、必要な場面で付け加える必要がある。これが、支援援助を超えた、指導である。

栗原「ほかに？」

C「ぼくは、Nさんと同じで、一つ一つのひまわりの方向が違うと思います」

栗原「はい。どうぞ」

C「絵が、色が縫ってあるところが、ザラザラというか、筆で塗った跡がある」

栗原「うん、おそらく、デコボコがあるんだと思いますね。（みなさんの手にある）これは、コピーですから、触ってもいいよ。ざらざらしないね。もし、（本物の絵に）さわることが出来たら、ひよっとしたらゴツゴツしているかもしれないね、油で固まってね。ほかに、ない？」

女兒、挙手。栗原「はい、お願いします」と指名する。

子ども「はい。花の種類がちがうと思います」

栗原「ううん、ちがうかも分らんね、これは書いた人にたずねないと分らんけど、（絵を見て）あっ、ちがうよね、たしか。種だけでも、違うよね。しかし、ひまわりは、ひまわりか（ひまわりの花であることには違いないの意）、ということかな」

C「べったりした絵ではなくて、奥行きがある絵だと思います」

栗原「平面的ではなくて、奥行きのある、デコボコの絵」

\*ビデオ画面を見ていると、子どもたちが次々と挙手してくれていて、教師が指名をするだけで新しい視点からの意見が出されて、授業が進んでいく。

### 発問「だれが描いた絵？」

栗原「じつは、これは誰かが描いたのよね。描いた人、知ってる？」

子どもの中の一人が挙手する。K「おっ」と驚いて、指名する。

栗原「知っている人、ちょっと手を上げて」

S児、一人だけが挙手する。

栗原「知らない人、手を上げて」

ほかの子ども全員が挙手する。

栗原「ああ、そう。それじゃあ、Sさん、言ってください」と指名する。

子ども「たぶん、ゴッホだったと思います」

栗原「なるほど。ゴッホ。よく知っていたね。どこで聞きました？ それ」

S児「ええと、うちに、そのコピーみたいなものがあって、それにゴッホと書いてあったり、あと、図書室にも、ゴッホという本がいくつかあって、借りて読んだような気がします」

栗原「なるほど。あなたが、（この絵を描いたのが）ゴッホと知ったのは、「うちにある絵の裏」（板書しながらゆっくりと）に書いてあったというんですね。すごいですね。そして、もう一つは、本の（栗原「本の中に」）」

C「いま図書室のあの花の後ろのほうに、シャガールとか、いろいろあるんですよ、（栗

原「ほおつ」と感心する) それにゴッホという種類があって、その中に書いてあった」

栗原「そしたらね、ゴッホの本の印に、二重かっこ(二重かぎ)しところ。『ゴッホ』の本があった。その本の中に、これ(「ゴッホのひまわり」)があったんだね」

栗原「はい。ゴッホというと、咳でもしている感じだけど、(子どもたちと参観者が笑顔になり、笑い声が聞こえてくる。)じつは人の名前だった。さあ、ゴッホという人の描いた、じつは「ひまわり」という絵の名前なんです。

今日の勉強はねえ。じゃあ、こうしましょうね。「ゴッホのひまわり」ということにしましょう。こういう勉強の題にしましょう。」

この直後に、栗原は「さあ、そしたらねえ、ノートを配ろうかなあ。これ、包んであるけど、一人一人にノートを配ってください」と指示して、子どもたちの一人にノートを配布してもらうことになる。

授業始まりから、ここまでに必要な時間は、10分あまりである。ここから、ノートの指導が始まっていく。本論での授業の記録と簡単な分析はここまでとする。

#### 4. ノートの実態と指導方法

以下に、ショウコのノートの様子を述べる。ショウコのノートは、全部で24ページが使用されているが、その内容は、以下のとおりである。\*をつけて、若干の解説をする。

(1 ページ)

二〇〇七年二月二十日 桑原先生

ゴッホの「ひまわり」、\*ゴッホの「ひまわり」カラーコピーの貼付

\*ノート配布の直後に指導した事柄である。行の空け方、字配り、字の大きさ、鉛筆の濃さ、鉛筆の持ち方、書くときの姿勢、左手の位置、両足をそろえる、などの指導事項があるが、この学級の子どもたちに対しては、ほとんど注意することは見当たらない。

(2 ページ)

##### 調べ方

- 本『ゴッホ』美術の本      ○事典      ○人物事典      ○人に聞く  
○絵の裏      ○辞典      ○パソコン      ○行ってみる

\*以上が、調べ方についてまとめた部分である。子どもたちで力を合わせて出来上がった板書を視写するのも、大切な学習活動であり、ノート活動の基本である。

以下は、友だちの発表を聞きながら、ノートにまとめた部分であると思われる。

##### ◎描いた理由

- ・ゴッホの友だちの画家「ゴーガン」がゴッホの家にはっこしてくるので、ゴッホはうれしくて、「ゴーガン」のために、ひまわりの花の絵をたくさん描きました。

##### ◎ゴッホの生涯

- ・本名は「フィンセント・ウイレム・ファン・ゴッホ」Vincent Van Gogh.

- ・一八五三年にオランダのズンデルトという町にうまれた。
- ・麦畑に立って、自分のおなかをピストルでうって自殺した。(1890)

(3 ページ)

◎弟「テオ」について

- ・ゴッホには、テオというなかよしの弟がいて、 | 十年間で八百五十の絵を  
ふたりはおたがいをとても大切にしていた。 | 描いた(一年間で約85枚)
- ・はなれて暮らすようになってからも、手紙の | 1987年イギリスのクリスティ  
やりとりを続けた。←「ゴッホの手紙」 | ーズというオークションで  
| 3990万ドル(日本円で58億円)

(4 ページ)

アルルのはね橋 \*コピー貼付

糸杉 \*コピー貼付

\*授業で配布した「ゴッホの絵や写真」のコピーが、はさみで切り分けられてノートに貼ってある。絵の下には、絵の題名が記入されている。私自身は、この資料貼付も、重要な学習活動の一つであると考えている。こう考えることで、子どもたちのノート活動が充実することになる。

(5 ページ)

\*この5ページからが、1・2時限目の授業を終えたあとの宿題の部分である。

#### 宿題

○ゴッホの自画像(耳に白い包帯をしたインターネットからの絵、貼付)

↑インターネット「ゴッホの自画像」

- ・ゴッホは死ぬまでに約40枚あまりの自画像を描いた。  
ゴッホの絵が売れたのは生涯でたった1枚の絵だけだった。  
「ひまわり」の絵は12点。  
十年間で2000余の作品を描く。  
ゴッホの作品にはうき世絵が多く用いられている。

(6 ページ)

- ・前のページの自画像の耳には包帯が巻かれている。

↓

ゴッホはゴーギャンという友達といっしょに暮らして、いっしょに絵を描こうと思った。ゴーギャンといっしょに暮らしていたが、二人はなぜか気が合わない。ゴーギャンと別れる時に、ゴッホはショックで耳をそぎ落としてしまった。

(小学あーとぶっくのゴッホ)

「ひまわり」

- ・ひまわりの絵は全部で一二点。  
そのうちの七点は、ゴッホの最盛期アルル時代にえがかれた。

(インターネット、ゴッホとひまわり)

(7 ページ)

6枚の「ひまわり」の絵(インターネットからのプリントアウト分)

\*以下のアンダーラインの部分が、仮谷祥子さんによる手書き。

- ・ 15本の向日葵、ゴッホ美術館（1889年1月）
- ・ 15本の向日葵、損保ジャパン東郷青児美術館（1889年1月）
- ・ 12本の向日葵、フィラデルフィア美術館（1889年1月）
- ・ 12本の向日葵、ノイエ・ピナコテーク
- ・ 15本の向日葵、ナショナル・ギャラリー
- ・ 3本の向日葵、個人蔵

絵を描き始めたころは、水さい画だった。

油絵は九〇〇点、素描は一一〇〇点。

「ともあれ、ぼくはぼく自しんの作品に対して人生をかけ、ぼくの理性はなかばこわれてしまった。それもよい。」

印象派⇒自分の印象でかくから

(8 ページ)

写真「オーベール村墓地前から見た秋の麦畑の風景、01,0919」

\* 栗原が現地で撮影してきたもの。10 ページの「オーベールの教会も」。

絵「ドービニーの庭」コピーの貼付。

(9 ページ)

絵「タンギーじいさん」の貼付。

(10 ページ) 写真「オーベール村の教会、01,0919」

(11 ページ) ゴッホの絵「オーベールの教会」のコピー貼付。

(12 ページ) 「ガシェ医師」の肖像画、コピー貼付。

ゴッホの自画像2種。コピー貼付。

紺色の背景の自画像と、赤色の背景に耳に包帯をした自画像。

(13 ページ) ゴッホ、紺色を背景にした「2本のひまわり」。コピー貼付。

(14 ページ) および (15 ページ) 「ゴッホのひまわり」授業の感想 (既述)

(16 ページ～24 ページ)

歌川広重「富士三十六景 さがみ川」など、「タンギーじいさん」の背景を飾る浮世絵の原画コピーが貼付されている。パンフレットの切り貼りである。

上記のノートの内容を見てもわかるように、このたびの「ゴッホのひまわり」授業を実施するに際しての目標の一つ、ノートを中心とした「総合学習の経営」という目標は、どうにか達成できたと考えている。ちなみに、中学校の授業実践の中で最初に「ノートを中心とした教科経営」を掲げたのは、鳥取県伯耆町立岸本中学校であった。

この中学校では、国語・社会、数学・理科においてはもちろんであるが、体育科においてもノート活動が重視されていて、体育の授業だけで年間2冊の分厚いノートが作成されているという事実を記しておきたいと思う。

## おわりに

授業開始については、授業者の栗原が指示したわけではなくて、すべて子どもたちの手により、静かで落ち着いた雰囲気の中で授業は開始された。図書室での「調査活動」に相応しい授業の始め方である。この授業始まりの自主管理が、ごく当然のように行われている点に、まずは只ならぬ「学習規律」を体得して、さらに十分な習熟がなされていることがうかがえる。

授業の始めに、急に見ることになった「ひまわり」の絵であるが、この絵についての気付きを発表するように求めると、子どもたちは次々と挙手して、意見を述べていった。それも、多様な意見が出された。この発表力も、全ての授業で共通に指導されてきた発表の仕方、つまり学習規律の指導の成果である。約10分間の授業を見るだけでも、子どもたちの「授業の実力」が十分に体得されていることが判明する。

以下は、次の機会に譲る。

### (注)

(注1) この授業の中で取り扱う教材「ゴッホのひまわり」については、すでに以下の3つの論文・学会発表でも公にしている。このたびは、筆者の体験してきた最も優れた「学習規律」を体得してきた学級での、総合的学習の「ひまわり」授業ということになる。

これまでに公にしてきた論文・学会発表は、以下のとおりである。

栗原昭徳・竹下真生「図書館利用学習のための入門授業(一・二) — 総合的学習「ゴッホのひまわり —」授業の構と実践」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第19・20号所収、2005。

栗原昭徳『図書館利用学習への入門授業—調べる授業から家庭学習・自主学習への発展—』日本生活科・総合的学習教育学会第14回全国大会(広島大会)、自由発表資料(全48ページ)、2005年6月25日刊。